



大草原の
小さな廃
家

川崎ゆきお

また、何もない状態が続いた。と、木村は呟いた。

仕事が切れたのだ。春先、見事なまでに何もない。多少はスケジュール表に記されたものはあるが、延びるネタではない。付き合い程度だ。これが初夏にある。それ以降のスケジュールは真っ白だ。大平原を見る思いだ。

しかし例年、そんな状態でも、夏頃仕事が入ってくることがある。そしてそれなりにスケジュール表にも、記すことが増えるようになる。だから、この例年を期待するしかないが、年の末を迎えても、全く何も入ってこなかった年もある。それを思い出したくないのだが、その可能性もあるのだ。

いっそのこと、初夏にある懇談会のような寄り合いに、行かない方がいいかもしれない。そう木村が思うのは、真っ白なスケジュール表の方がすっきりするからだ。そして、大平原状態の方がかえって気が楽だ。

懇談会では仕事関係者と会うことになる。これが忙しいほどの仕事があるのなら、意気揚々と行けるのだが。

今の木村の状態では仕事のある仲間と顔を合わせたくない。

木村はスケジュール表からそれを消した。

★

その初夏となった。相変わらず木村のスケジュール表は大平原だった。線で消しただけの懇談会は、まだその痕跡を残している。まるで大草原の小さな家のように。

その当日となった。

出席するとも欠席するとも、主催者には伝えていない。

木村は気が変わり、行くことにした。最近の仕事のことなど全く考えていなかったからだ。果報は寝て待てに徹していたのだが、やはり、少しは動いた方が好ましいと考えを変えた。

懇談会会場は貸し会議室の中ぐらいの部屋だった。

木村は中に入るが、無人。

五十人は座れるスペースだ。

木村は部屋を間違えたのかと思い、ドアの外に出るが、懇談会名がしっかりと記されている。間違いはない。

そこに、いつも幹事をしている田所が現れた。

「いないですよ。人、田所さん」

「ああ、君だけか、元気なのは」

「どういうことです」

「みなさん都合で駄目みたいなんだ。今、電話しまくっているんだけどね」

「そうなんですか。じゃ中止ですか」

「ああ、元気なのは木村さんだけだからね。一人じゃ懇談会も何もないでしょ」

「そうですねえ」

「しかし、さすがですねえ、木村さん」

「いえいえ」

「元気で何より、生き残っているのは木村さんだけだったとはねえ」

「あ、はい」

木村も死んでいるのだが、この大草原の小さな廃家を見て、少し勇気付けられた。

了